11. 呼吸器系Field Cancerization症例における遺伝子学的評価
小山倫浩、大野敏弘、木本真紀子、室野、安田、学谷澄一、合川公雄、能勢正弘、宗子、
栞利三、吉松隆、小倉満太郎、花村武志、安元公正（産業医科大学第2外科）
【背景と目的】発癌物質に曝露された組織や臓器が遺伝的に不安定となり、多中心性に発癌するという概念はfield cancerizationとして頭頸部癌の分野で提唱されている。今回、呼吸器系にfield cancerizationを認め、気管支肺内注入療法（BAI）を施行した症例を経験し、遺伝子学的に評価したので報告する。【対象と方法】65歳、男性、喉頭頸部手術4ヶ月後に血痰を認め、気管支鏡検査にて右主気管支に隆起性病変を認めた。本例をBAI前後において段階的に観察し、手術と生検材料より1）laryngeal carcinoma、2）tracheal carcinoma、3）cancerization、4）left bronchial tumor、5）pulmonary tumorの部位の病理学的診断をp53発現と突然変異の検出を行った。（結果）BAI前後で2）のp53dysplasiaとして診断され、他是扁平上皮癌と診断された。BAI後は2）3）dysplasiaと診断されたp53の発現はdysplasiaと共に検出されたがp53の変異異変解析では、部位により1）codon248のG→A位置異変、2）codon286のA→C位置異変、3）codon286のG→A、A→C変異を有するものと3）種類のクローニングを認め、BAI後新たにcodon286のG→T位置異変を認めめた。（考察）喉頭頸部手術前の気管支腫瘍の発現において1）polyclonal増殖性腫瘍を認めた。2）内視鏡的あるいは内視鏡学的に判定された腫瘍範囲によりp53異常を認める範囲が広域であり、3）p53変異による腫瘍クローニングの変化を認めた。

12. 良性肺疾患にみられた異型気道上皮の分子生物学的検討
井上孝志、中西洋一、高砂浩一、出水みる、原田大志、肝付兼仁、緒屋洋、南貴博、原信之（九州大学胸部疾患研究施設）
【目的】良性肺疾患にみられる異型気道上皮、肺疾患患者にみられる異型気道上皮の分子生物学的異変を検討する。【対象と方法】対象は1993年5月以降当施設で得られた12例の検体を用いた。100例の正常気管支型上皮を検討した。【結果】K-ras遺伝子の変異を検討し、K-ras23p12、3p21のK-ras遺伝子の部位の細胞異常型の進行に伴って増加し、p14.2のHITT遺伝子の異変の相関を認めた。良性肺疾患の中でも特にIIP症例でp12p21区間に異変を認めた。IFNA遺伝子のLOH検討では、K-ras遺伝子のcodon12、13に異変を認めた。【考察】良性肺疾患の異型気道上皮においても3pの異常をみられたことから、原疾患にかかわらず異型気道上皮においては遺伝子異常が存在し、肺疾患の過程を理解する上で重要と考えられた。IFNAに異常を認めると、高率に肺疾患を合併する慢性気道の特徴に対する分子生物学的根拠となるものと考えられた。

13. 気管支変化を伴った多発外傷の1例
金城義美、永吉政人、林田誠、内田一、西村邦男、藤村基（琉球大学第2外科）
【症例】29歳、男性、自動車事故にて左胸部を受傷した。【結論】気管支変化を伴った多発外傷を経験した。